

京都市京セラ美術館の建築について

Kyoto City KYOCERA Museum of Art

像を重ねていく美術館

青木 淳

京都市美術館本館は、現存する日本の公立美術館の中でもっとも古い建築です。創建は1933年、いわゆる帝冠様式を代表する建築で、以来、第二次世界大戦をまたいで80年余り、京都市民をはじめ多くの人の記憶に深く刻み込まれてきました。

建築そのものは動かず、変わりません。しかし、それを見、経験する人々が心に写しとるその像は、時とともに変化していきます。建築とはこうして、多重露光された像が幾重にも折り重なり、豊かな^{ひだ}襷がつくられていくものです。そのことを大事にしつつ、それを現代に生きる空間として整備しなおそうとする試みは、今後、ますます重要なこととなっていくと思われます。今回の京都市美術館の大規模な改修は、その点で大きな意義と責任を持っていることを痛感しています。

この計画を進めるにあたって私たちは、すでにこれまでに重なってきた像の層を引き継ぎ、そこに新たな一枚の像を加えようと思いました。そうすることで、この建築を守りながらも、そこに別の様相を出現させられないか、と考えたのです。

なかでも大事にしたのは、西側・神宮道側の前広場を広場として残すことと、この建築がもともと持っている西玄関から東玄関を貫く軸線を強めることでした。

まず西側・前広場と本館建築の間に切り込みを入れ、手前の中央を押し下げ、前広場をごく緩い傾斜で中央に向かって下るスロープ状の広場に変えました。このことによ

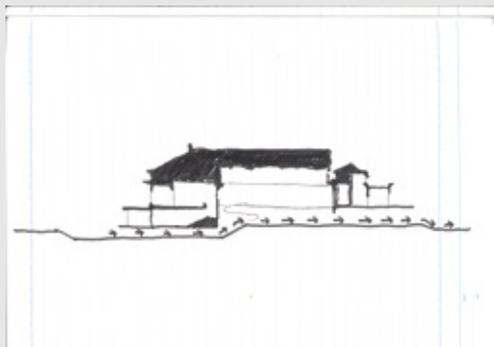
り、神宮道からの本館の景を変えないままに、エントランスを1階西玄関からその地下に移しました。広げられた切り込みにはガラスを嵌め、新たな空間「ガラス・リボン」を生みだし、ミュージアム・ショップやカフェの用にあてました。

地下エントランスを直進し、かつては「下足室」として使用されていた空間を通り抜けたところには大階段を新設し、中央ホール（旧大陳列室）、東玄関、さらにその先の東山を望む日本庭園までにつながる一直線に伸びる強い軸線空間を挿入しました。この美術館に埋め込まれていた軸線を引き出そうとしました。

またこれまで南北2つの中庭を占領していた設備機器を廃し、南中庭を本来の中庭に戻す一方で、北中庭にガラス屋根を懸け室内化しました。ここでも、いつしか隠されてしまっていたこの美術館の可能性を発掘しようと思いました。

全館のための設備機器置き場として、また現代美術に対応する新たな展示室を新設するために、美術館北東に位置する川崎清氏（*注）による増築部「収蔵棟」を新館に改築しました。大きなボリュームで出現する新館は、煉瓦タイルの本館の特性をある位相では引き継ぎ、またある位相では切断し、付かず離れずの関係に置こうとしました。

こうして私たちは、新旧の対比を生み出すことを目指す改修とはまったく異なる、より繊細なもうひとつの改修の道を築こうとしてきました。



青木 淳によるスケッチ



*注 川崎清（1932-2018）：建築家、京都大学名誉教授。京都における作品に「京都市勧業館みやこめっせ」、「相国寺承天閣美術館」などがある。JR京都駅の国際設計コンペ審査員長を務めた。